

CONTENTS

特集 国語を考える

- 巻頭言 10 国語の大切さ ● 清水 司
- 論文 12 国語の重要性について ● 藤原正彦
- 座談会 16 現代社会と言葉遣い
(出席者) 甲斐睦朗／松岡和子／小池 保／鳥飼玖美子／(司会) 小池啓三郎
- 報告 26 国語に関する国民の意識 ● 文化庁文化部国語課
- 論文 30 やまと言葉の豊かさ ● 中西 進
- エッセイ 34 「美しい日本語」を取り戻すための私の処方箋 ● 春風亭小朝
- インタビュー 36 幼児期からの言葉のしつけが日本人の心をはぐくむ ● 野村与十郎
- 事例紹介 38 「未来をひらく子供」に正しく美しい言葉を ● 浜松市立曳馬中学校
- 論文 40 書けないとはどういうことか ● 樺島忠夫
- エッセイ 46 朗読あれこれ ● 久米 明
- インタビュー 48 私にとっての日本語 ● ダニエル・カール
- 報告 50 日本語教育の手法による日本語・日本文化への気づき ● 西尾瑠子
- 解説 54 近年の国語施策 ● 文化庁文化部国語課

特別記事 失敗知識活用研究会の活動について

- 58 失敗知識活用研究会の活動について ● 科学技術・学術政策局基盤政策課

84 編集後記

82 鑑賞席

78 海外最新情報

76 レットライ！
● 国立山口徳地少年自然の家

74 部活動わくわくプラン21
● 複数校運動部活動の取組

72 科学技術のフロンティア
● 海洋科学技術について

70 新しい科学技術の重点分野
● 情報科学技術の研究開発の推進について

68 魅力ある教員を求めて
● 新しい研修体系の構築

66 全国子どもプラン
● 土曜日・夏休み専修学校体験学習

8 インフォメーション

6 であいふれあい・黛まじとか

カラー

- 1 ところ・ひと
● 東京都立小石川高等学校
- 表2 温故知新
● 白水溜池堰堤水利施設
- 表3 温故知新
● 臨界プラズマ実験装置 (111-66)

やまと言葉の豊かさ

学校法人帝塚山学院学院長

中西 進

やまと言葉は本来の日本語である。ところが漢字で表記されるようになると、もともとの意味が分断され、むしろ漢字を基準としてやまと言葉が理解されるようになる。たとえば賢いと

惶^{かしこ}まるとは、まったく別の言葉だと思われるように。また、音で表記されることによって別のよみ方をされ、本来のやまと言葉^{あか}を失った場合もある。われわれはこうした漢字の垢を落とし、本当のやまと言葉の豊かさをとりもどす必要がある。

何かを口でいうと、相手はすぐに「それはどんな字を書くのですか」と聞く、というのである。

そこで文字をいってみても、所詮^{せけん}文字は中国のもので、日本語を当てたのにす

むかし、民俗学者の柳田国男が「どんな字病がこわい」といったことがある。

ぎない。当てる一つの意味は相手に伝わるかもしれないが、ほかの意味は捨ててしまうことになる。

あるいは、まるで当て字のばあいもある。その時は無関係な字を当てているだけだから、かえって意味は別のものになってしまう。

多少、下世話な話で恐縮だが、私はときどき大阪から京都の自宅にタクシーで帰ることがある。阪神高速道路を京都南で出て、久世橋を渡って桂へ帰ってくる。

その途中にむずかしい三叉路^{さんさろ}があつて、運転手はよく間違える。私は桂へ帰るのだが、この分かれ道では「桂」と出ている方へは行かず、もとより「神戸」の方にも行かず、まん中に「物集女」と書いて

てある方へ行かなければならない。

そこで三叉路の手前まで来た時、私はいつも、「あの物と集めると女と書いてある方へ行ってくれ」という。最初は「もずめの方へ行ってくれ」といったのだが、だれ一人わかってくれない。「え？」とか「はあ」とかといわれるから、仕方なく、いつからか「あの物と……」というようになった。

すると運転手は、「わかりました。女の方ですナ」というから、私もつられて、「そうだ。女の方へやってくれ」ということになる。

これなら、もう「もづめ」という元のことばは全く忘れられているだろう。こう書いたおかげで、運転手たちは百人が百人「何か物を集める女のいる土地があるのだろう」と思っているにちがいない。私は、「もづめ」は「をづめ」が変わったものと考え、「をづめ」とは橋詰に愛称をつけたものにちがいない（注）。

このあたりは桂川に近く、橋のたもとでは「小集楽」の遊びも行われたと思われる。

『万葉集』には、

住吉の小集楽に出でて現にも己妻す

らを鏡と見つも（巻一六、三八〇八）

という一首もあり、『日本書紀』（天智天皇九年五月）にも

打橋の 集楽の遊に 出でませ子

玉手の家の 八重子の刀自……

という歌謡がある。

橋詰は異界へと橋を渡っていく境界のところだったから、神聖でもあり不吉でもある聖域だった。「女の方だ」などといったは申訳ないところなのに、「物集女」と当て字することで、意味がまったくわからなくなってしまったのが、いけないのである。

まさしく、柳田国男は「どんな字病がこわい」と、ここでも言うだろう。

そもそも「つめ」だって「詰」と書いてたり橋爪さんという人もいる。それで一々意味が違うわけではなく、本来は道がつまるところ、行きどまりのことだった。この「行きどまり」だって「手づまり」だって「詰め将棋」だって指の爪だつてみんな一つだ。

まずは日本語——やまとことばは、漢字から解放してやらなければならない。

二

このように考えると、つくづくと日本語はすばらしいと思う。

「あの子はかしこい」というと、われわれはすぐに賢い子だと思うが、一方「かしこまる」といえば相手は大変えらい人か天皇さま、神さまの類である。

「大君の 命かしこみ」という万葉のことばはおもしろい語史をせおつていて、戦争中は「天皇の御命令がそれ多いので」と訳された。ところが戦後大手を振って歩いた解釈は「天皇の命令がこわいので」であつた。

これほどにこわくて、こちらがかしこまってしまうほど「かしこ」ということばは、「賢い」という意味もふくんでいたのである。やはり、いいかげんに「賢い」などといつてはいけない。賢明で当方をおそれさせるものが「かしこい」の意味であつた。

別のいい方をすれば、日本人は賢明さを神クラスで評価していたことがわかっておもしろい。



なかにし・すすむ 1929年東京生まれ。比較文学専攻。大阪女子大学長などを経て、現在、帝塚山学院学院長。日本比較文学会会長などをつとめた。主著『万葉集の比較文学的研究』（日本学士院賞）ほか。

ところが昨今、漢字が普及したあげくに「かしこい」と「かしこまる」は別語とさえ考えられるようになった。一方は賢という意味、一方は恐懼という意味。漢字で書くところがうから、同一のことばだなどというが無学の徒と思われるようになった。

だから最初に「どんな字で書くことばか」と尋ねるのがかしこいのである。

同じことは、あげていけばきりが無い。刺身を食べようとする大根が刺身のツマとしてついている。このツマを「ワイフ・オブ・サシミ」というと外国人には、もちろん通じない。

ワイフのツマは妻。これは「人妻」とか「誰が妻」などと古典にもたくさんでてくるが、一方『万葉集』では夫もツマである。ワイフはイコールハズバンドである。

こうなるとツマとは何かを、刺身のツマや人妻をこえて考えなければならなくなるが、要するにツマとは相手のことだとわかる。だからワイフだハズバンドだというより、パートナーといった方がよい。

じつは最近、入籍しない男女のカップルがふえているのだという。ワイフだハズバンドだといわれる関係を拒否しているのだが、それをパートナーというらしい。

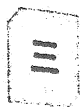
何と古代の日本語は、いまはやりのパートナーを意味していたのである。

もちろん思い当たる人も多いだろう。昔は別居婚だったから、みごとに現代の風習とそっくりでありツマという日本語は、男女の関係を結婚第一と考え、家尊重の歴史に殺されていた原義を、やっと現代に到って、とり戻したのである。

『続日本紀』という奈良時代の歴史書には男性の官吏と女官との、それぞれの叙位を記しているが、この記述をみても、みごとに男女は対等である。

別にパーティには夫人同伴で出席せよという勅令もある。それでこそツマだということがつくづくと知られて、感動的ですらある。

夫人同伴は鹿鳴館から始まったのではない。男女同権はアメリカから教えられたのではないのである。



こんなに奥行き深いやまとことばの
受難の歴史は、最初にあげた漢字病の上
に、音によっても、複雑な様相を見せる。
天皇陵などがあると、町名が「みささ
ぎ町」などとなりやすい。そこで京都の
ある町が美陵町という町名をつけた。ほ
んとうは陵だけでも「みささぎ」なのだ
が、そう読むのがむずかしいと考えたの
か陵は「ささぎ」だと勘違いしたのか、
とにかく美陵町と名乗った。

ところが最初のうちは「みささぎ町」
と人びとはよんでいたのに、いつの間に
か「びりよう町」というようになった。
みささぎということばが、現代人の教養
にあまったからである。

そうなると、せっかくの「みささぎ」
という美しいやまとことばは跡形もなく
なつて、意味不明の「びりよう」だけが
残ることとなった。

もっと驚いたこともあった。大阪市の
南部に遠里小野という地名がある。町が
あり、大きな遠里小野橋が大和川にかか

っている。

私が最初この地に接したのは地図でな
く、じかにその土地を通った時であった。
目の前に現われた標識に「遠里小野」と
出て来た時は感動的であった。「あつ」と
叫んだほどであった。なぜなら、このこ
とばは『万葉集』にも

住吉の遠里小野の真榛もち摺れる衣
の盛り過ぎ行く(巻七、一一五六)
と登場する地名だったからだ。

ところが近づくにつれて標識の下に書
かれたローマ字を見た時は、さらに驚き
が大きかった。「ORIONO」と書かれてい
た。

要するに古雅な「とおさとおの」など
とよめるはずはない。そうよめなくなる
と、もう文字を棒よみにして「おりおの」
という次第である。

こうなると意味不明で発音しているの
だから、もう文字はどうでもよい。やが
て降斧とか織尾野とかと書くようになる
かもしれない。

やまとことばとは、現在の日本人が最
初に作り上げたことばとして、純粋な日
本語といってよい。八世紀に日本ふうを

高らかに宣言しようとしててきた『万葉
集』は、ほとんどがやまとことばで、漢
語は十数語しかないほどだから、やまと
ことば即ち本来の日本語と考えてよい。

このことばは、民族の感性や思想を表
現する美しく豊かなことばなのだが、そ
れは以上のような漢字との葛藤のなかで、
今やほとんど本来の性格や内容が忘れら
れようとしている。

そうした垢を落とし、本来の姿を見つ
め直すことが必要であろう。

やまとことばが何よりも日本人の心の
反映だからでもあるし、その原義を探り
出すことが、現代人にとって大きな教訓
となるからである。

日本語が乱れているとみなが言う昨今
である。しからばなおのこと、古来のや
まとことばを吟味して豊かな生き方を探
り当てていきたい。

(注)『万葉集』とは、横の「つめ(隈)」で、横のたもと
の意。また、そこで男女が集まって行った宴集のこと。

特集

21世紀の 科学技術革命、 産業革命を 目指して ナノテクノロジーの推進

●巻頭言

二一世紀の科学技術革命、産業革命を目指して——岸 輝雄

●座談会

二一世紀の科学技術革命、産業革命を目指すためのナノテクノロジーの夢

門村幸夜／川合知二／北澤宏一／横山直樹／藤嶋信夫

●事例紹介

物質・材料研究機構／岡崎国立共同研究機構／理化学研究所／名城大学／東北大学／NECソリューションズ／東京工業大学／松下電器産業株式会社／東京大学

ところ・ひと
であい・ふれあい

下鴨神社
丘 みつ子

編集後記

▽梅雨があけたと思ったら、連日記録的な猛暑が続く、各地で体温以上の気温となり、勤務を終えて家に帰るとグッタリしてしまう日が続いています。官庁街の植込みもそれこそ元気がなく、一雨も二雨もほしいところですし、このままで行くと、この夏の水不足が心配されます。

▽日頃、忙しくて家庭サービスが来ないでいるお父さん、子どもが夏休み期間中、小旅行などいかがですか。家族旅行によく行く子どももほど、最近流行の「さける」ことが無いというのを聞いたことがあります。▽さて、今月の特集は、「国語を考え

る」です。国語の重要性について、「言葉遣いの大切さ」、「文章表現力の大切さ」、「正しい話し方」、「美しい言葉」等を、座談会、論文、エッセイ、インタビュー等で紹介しました。国語は我が国の文化の基礎を成す大切な物です。日頃、何気なく話している言葉、書いている文書など、もう一度見直してみてもいかがでしょうか。

▽甲子園球場で高校球児の熱い戦いが始まります。郷土の高校の応援に力が入るところです。夏バテに気を付け、この暑い夏を乗り切りたいものです。（H・N）

投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部科学時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んでの感想、御意見等をお寄せください。

●「読者からのたより」投稿規定

①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記（誌上匿名可）③掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

文部科学省大臣官房政策課「文部科学時報」編集部

※電子メールでも受け付けております。

●「文部科学時報読者アンケート」

文部科学時報読者アンケートは添付のはがきのほかに電子メールでも受け付けております。

宛先名「jiho@mext.go.jp」

コンピュータネットワークを利用した文教行政の広報

文部科学省では、我が国の文教施策等を広く皆様に紹介するため、インターネットホームページを利用して情報を提供しています。また、子どもホームページを設け、情報を提供しています。

ホームページアドレス：

<http://www.mext.go.jp/>（半角入力）

子どもホームページアドレス：

<http://www.mext.go.jp/kodomo/index.htm>

MEXT.61 月刊

文部科学時報 8月号

第1503号

●著作権所有——文部科学省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 03-5349-6666（営業部）

URL <http://www.gyosei.co.jp>

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成13年8月10日印刷

平成13年8月10日発行

定価610円（本体581円）（〒84円）
年間購読料7,320円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 2001
JSPAC 出 0109786-101

ISSN 1346-325X

●この刊行物は再生紙を使用しています。